

打樋川 続

神野麻郎

金足老人は六時前に目をさました。春も開けてくるころで暖かく、外はもう明るい。いつものように居間に移り、ゆつくりストレッチを始めて二十分ほど身体を動かし、坐って短い誦経と黙想もした。終わると台所で二人分の朝食を作った。目玉焼きと野菜サラダに果物も付け、パンを焼き、牛乳を温める。昨夜の残り物を入れて、自分の昼の弁当も作った。

その用意が終わるころに寝室の方で目覚ましが鳴った。起こしに行ったが、パジャマのソラはまだ眠りの中だ。揺すって何度か声をかけるとやっと蒲団の上につき上がり、目をこすりながら「おはよう」と笑った。長めの髪が寝乱れている。着がえと洗面をさせた後、台所のテーブルでいっしょに朝食をとった。金足は朝食いだが、ソラは少しずつゆつくり食べる。でも食が細いわけではない。ぼつぼつしゃべっているうちにソラの頭もはつきりしてきて、金足が、ソラの新しい担任についてどんな先生なのかと訊くと、「〇〇先生はねえ……」とおもしろくおかしくしゃべった。

食事が終わると、ソラは登校の準備をした。ついこの間まではランドセルに黄色のカバーをつけていたが、二年生になってそれもとれて赤色がつるつるしている。玄関で靴に足を入れながら振り返り、

「ジツチャ、今日は遅刻しないで帰ってきてよ。わかってるね。行ってきまーす」と言い置いて飛び出していった。そろそろ道の角の所で近所の登校班が集まる時刻だ。

ソラを送り出してからも金足はなかなか忙しい。蒲団を上げ、掃除機を動かす。回しておいた全自動の洗濯機から洗濯ものを取り出して庭に干す。八時半には車で出勤だ。

去年の秋、金足は再び働きはじめた。といっても、週四日、九時から四時までのパート勤務だ。ソラが七歳になって多少家事の手伝いもでき、学校生活にも慣れてきたので時間の余裕ができ、また実際上の必要もあって再就職するつもりになった。就活にはやや苦労した。田舎のこととて求人が少ない上に、老人を採用してくれるところはなかなか見つからない。あきらめかけていたところへ、市内の電力関係の会社に運よく拾ってもらえた。プラントの一部の管理や修理が主な仕事で、若い時に取得した資格や以前勤務した化学工場での経験を多少生かすことができた。職場は南の方の埋め立て地にある発電所の敷地内にあつて、車で十五分ほど通える。

その日、働きながら、金足は二つのことが気になっていた。一つはその日の午後の家庭訪問だ。二年生になったソラの担任の先生と会って話すのは初めてだ。

去年の同じ時期の家庭訪問の折には、その時の担任に、ソラはまじめに勉強に取り組んでいるが、生活面では感情が不安定でよくケンカをするし、よく泣くと指摘された。担任は身の上書を見ながら、「お母さんもお父さんも同居されてないので、そうですか……」とも言ってふしぎがった。金足は、ソラは入学前の二月に保護者だった祖母を亡くしたばかりなんです、家でもめそめそ泣いていることがよくあります、それでも学校は休まないし、本人なりによくやっているとと思います、と伝えた。保護者欄が金足の名前になっているので関係が聞かれた。金足は、隣家の者でおばあさんから頼まれてソラを預かっています、里親のような者です、と率直に答えた。担任はちよつとげんなりな顔をして、一度児童相談所に相談されては、と勧めた。

そして、早速学校から連絡が行ったのか、後日隣町にある児童相談所から電話が入り、ほどなく中年の男女の二人組が訪問して来た。まず親戚でもない二人がいつしよに住んでいる事情を訊かれ、金足はまた一通り説明しなければならなかった。ソラのふだんの暮らしぶりや家の経済的な事情についても訊かれたが、金足の人間性を品定めする視線も感じた。何か問題があればいつでもご相談ください、と二人はパンフレットを置いていった。

気になっているもう一つのこととは、前夜北海道に住む実娘の祐佳から久しぶりに電話があり、連休に家族で四国旅行をする予定で、その折に金足の所にも立ち寄りたいと伝えられたことだ。聞いて、もちろん金足は娘一家に会えるのを喜んだ。祐佳とも、たまの音信は続いているが顔を合わせるのには十数年ぶりだし、その夫や、自分の実の孫になる子供たちは時おり送ってくる写真で知っているだけだ。もしかすると娘一家に直接会えるのは最初で最後のことになるかもしれない。電話の調子からは、すっかり大人になり自分も家族をもった娘が、離れて暮らす孤独な実父をそれとなく思いやる気持ちも感じられた。ただ、金足はソラのことが少し気になった。要らぬ心配かもしれないが、両親と子供たちがそろった幸福そうな家族を目の当たりにすることになる……。

ふだんより少し早く退勤させてもらって車で帰宅する途中、小学校に寄ってソラを拾った。ソラは、金足の勤めがある日の放課後は金足が迎えに行くまで校内の児童クラブですごしている。

自宅で待っていると、予定の時刻より少し早くソラの担任が自転車であつて来た。まだ若い小柄な女の先生で、玄関のタイルの上に椅子を置いて掛けてもらった。こういう場合の応対に金足はとまどうが、とりあえず用意していた菓子と茶を盆に載せて出した。ソラは初め出てきて先生に挨拶したが、はにかんですぐに奥へ入ってしまった。先生から、

「ソラちゃんは、少しおとなし目ですが、勉強も運動もよくがんばっています」と聞いて、金足はひとまず安堵した。

「お家での勉強はどうされていますか？ 塾には通われていますか？」

「いえ、塾には行ってません。私が少し見てやっています。……あの、ソラは、クラスでケ

ンカをしたりよく泣いたりしているようなことはないですか？」と金足は少し声を落として気になっていたことを訊いた。

「いいえ、ないですよ。休み時間は仲のよいお友だちと楽しそうに遊んでます」と言っ、根が陽気らしい先生は明るい声で笑った。

「あの、ソラちゃんはクラスの男の子たちにも一目置かれているんですよ。一度だけ、よくからかいて来るちよつとやんちゃな男の子と取っ組み合いになって、そしてソラちゃんの方が勝ったんです。男の子は泣いてしまいました」

担任が帰った後、金足はよい気分になって台所で夕食の支度にかかった。自分の机で宿題や明日の準備を終えたソラも立ってきて配膳を手伝う。食べながら、

「先生、ソラのことなんかゆうとった？」と訊くので、

「ああ、ソラはよく勉強して友だちとも仲よく遊んでると言われてたよ。えらいよ、ソラ」と褒めてやると嬉しそうに笑った。食べ終わるとソラは食器洗いを引き受けた。この一年少々で驚くほど手足が伸び、もうシンクの水道にも楽に手が届く。

食後少し休んだ後、居間のテーブルで一時間ばかり、金足は参考書を使って算数と国語を教えた。どちらももう三年生用に入っている。就学以前からのそんな習慣が今も続いている。初めの半年間ほどは、毎夜の勉強の強制を幼いソラは苦にした。金足はくり返しかみくだいてその必要を説いたが、十分わからないのは無理もなかった。注意が散漫なのでちよつと厳しく叱りつけると、部屋の隅に行って、「ママ、ママ」と泣いていたこともある。かわいそうでもあったが、しかし勉強の習慣をつけ、勉強に多少の自信をもつことがこの子の一生の財産になる、これは自分がしてやれる数少ないことのうちの一つだ、と金足は心を鬼にした。なんとか毎晩テーブルの前に坐る習慣がつくと、ソラは理解の早い方で、新しい内容をおもしろがりもし、まずまずのスピードで進んだ。

就寝前には蒲団に寝ころびながら本を読んでやる。部屋の古めかしい木製の書架に子供の用の絵本や伝記や図鑑の類がもうかなりの冊数並んでいる。町の書店で買ってきたものもあるが、ネット通販で安く仕入れたシリーズものが多い。

ソラは寝る前のこのひと時を楽しみにしている。くつろいで、ところどころで本の中身や表現について二人であれこれ言い、笑い合う。ソラは本の好きな子だとおばあさんから聞いていたが、それは一人で過ごす時間が長かったせいなのかもしれない。今も本好きは変わらなかった。

寝床にくつろいで寝ころぶと、なんだか心まで重力から開放され、想像は部屋を飛び出て自由に広がる。老人の金足にすら多少ともそうなのだから、幼いソラにはもっとだろう。とても母親のようなやすらぎは与えてやれないが、せめてソラの子供らしい想像力のやわらかな飛翔に金足は付き合ってやりたかった。それに本は、世界が大きくかつ微細であることも、時間は過去から未来へと途方もなく長く続いていることも教えてくれる。

ここ数夜読んでいるのは「竹取物語」の絵本だ。月からたった一人でこの世界にやってきて人間の間で暮らすようになったかぐや姫にソラは惹かれていた。かぐや姫に求婚に来た五人の貴公子のともでもない失敗談に笑いこぼれる。龍はほんとにいるのかとか、ツバメの子安貝はほんとにあるのかとか訊く。でも竹の中には人が入っているのかとか、月にはほんとに人が住んでいるのかとかはもう訊かない。

数ページ読んでいるうちに、本を支えている両手が重くなってきた。ソラの声も止んだ。金足の腕に小さな頭を乗せてもう眠っている。

ソラの祖母は三年前の秋に腸の癌が見つかり、一年数カ月闘病した。入院をくり返した。その間、金足はおばあさんが入院中はソラを預かって世話した。おばあさんが家に戻っている時は、ヘルパーが入って主な家事をやってくれたが、こまごまとした用事やソラの見守りなどは金足が引き受けた。勉強を見てやるほか、幼稚園の運動会や音楽会などの行事にもおばあさんの代わりに参加した。おばあさんは金足に感謝し、申しわけながったが、金足には苦労でも苦痛でもなかった。むしろ、寂しい自分の余生を励ましてくれる新しい家族を得たような気持ちで、とくにソラのしぐさや表情や言葉のおのずからなかわいさをそばで見聞きしているのは楽しかった。ソラはおばあさんのいない生活を涙も見せずにけなげに耐えながら、若木が伸びて枝葉を広げていくように成長しているように見えた。

おばあさんには、たまに大阪から長男が見舞いに来た。その中学生と小学生の子供たちがいつしよのこともあった。オジさんやイトコたちの来訪のたびにソラは喜んだが、彼らはいつも長くはいられずに帰って行った。金足はその長男からも礼を言われた。しかし、できればソラをうちに預かってやりたいのですが、家は狭く、共稼ぎで時間の余裕もなくて……と言いわげが続いた。忙しいのか、その共稼ぎの妻は一度も姿を見せなかった。

ソラはおばあさんが退院してくる時はもちろん喜んだし、入院中も見舞いに行きたがった。車で二十分ほどのその市立病院に、金足はできるだけ連れて行ってやった。病室に入ると小さなソラはよくおばあさんのベッドにもぐりこんで甘えた。

おばあさんはソラの就学を楽しみにし、赤いランドセルをだいぶ前から用意していたが、その登校姿を見ることもなく亡くなった。おばあさんの遺言で、長男家族とソラと金足だけで見送った。横浜に住んでいるというおばあさんの娘、つまりソラの母親は来られなかった。葬儀の後で、聞きつけた近所の人たちやゆかりの人たちがぼつぼつと弔問に来たが、長男家族が去った後は金足がその人たちの応対も引き受けた。遺骨は北の方の町はずれの墓地の、船乗りだったというおばあさんの夫の眠る墓に収められた。その後は二、三カ月に一度は、ソラを連れて墓参りに行くようにした。

亡くなる数日前、見舞いに行った時のようすが金足は忘れられない。死期を悟ったのか、おばあさんはベッドの上に起き直り、苦しい息をつきながらも自分の家族のことやソラの

親たちのことを詳しく語った。そして、情けないことだが今はソラを親身に見てやれる親族がない、まことに身勝手なお願いだ、どうかまだしばらく、哀れなソラのことをよろしく頼みたい、と涙を流した。あなたさえよければ、ソラを養女にしてもらってもよい、そのことは横浜の娘にも、大阪の長男にも伝えてある、遺書にもそう書きました、とも言った。

ソラと二人だけの暮らしはおおずとおおずと始まった。ソラももう金足の家で寝起きすることには慣れ、おばあちゃんの死という衝撃も大人たちが回りで心配するほどではなかったように見えた。しかし、そうではなかった。葬儀の時、ソラはあまり泣かず、大人たちが同情してあれこれかまうのに、はにかんで笑顔さえ見せていた。六歳にはまだ人の死という事態の重さがよくわからなくても無理はないと金足も見せていた。ところが葬儀が終わって人が引いていくと、急にソラは無表情に、不活発になり、それが長引いた。それは、小さいながらに大きな悲しみにけなげに堪えている姿なのかもしれない。ある時、姿が見えないと思ったら、隣家の中から泣き声が聞こえてきた。驚いて金足が行ってみると、おばあちゃんがよく坐っていた居間の畳の上に突っ伏してソラが大泣きしていた。金足が呼びかけながら小さな身体を抱き起こしてやると、涙や鼻水に濡れた顔で、しゃくりあげながら何か金足に訴えようとする。でも声にならなかった。「え？ 何？」と金足は訊き返した。何度か言おうと試みてようやく聞こえてきたのは、「おばあちゃんはどこ？」、「もう帰ってこないの？」という言葉だった。金足の手をすり抜けて今度は畳に仰向けになり、手足をバタバタさせて、「いやだあ、いやだあ！」とも泣き叫んだ。金足はそのまま泣くにまかせた。上手な慰め方も知らない自分がふがいなかった。

それ以来、ソラはことあるごとにおばあちゃんの不在ということが意識されるようで、めめめと泣き顔を見せることが多かった。幼稚園も休みがちになった。金足は遊び相手になつてやり、天気の良い日には自転車でいっしょに出かけたり、近くの遊具のある公園に連れていったりした。三月の卒園式には何とか出られて、先生や友だちと交わって少し笑顔が戻った。

それでもソラは、しだいに金足と二人だけの暮らしに慣れていくようではあった。じつは金足の方も、始めてはみたものの変化を受け入れるのに時間を要した。長年一人だけの静かな暮らしに慣れてきたので、常に小さな子供がそばにいる生活に戸惑いは大きかった。とはいえ、なんとか今をしのぎ、先を見なければならなかった。当座はソラの小学校入学という大きなイベントが待ち構えていた。いちおうの準備は闘病しながらおばあさんがしてはいたが、時期が近づいてくると足りないことや戸惑うことが多かった。でも近所の橋本さんという、ソラの友だちのお母さんが同情してとくによく助けてくれた。橋本さんはソラの毎日の身だしなみにまで気を配ってくれた。おばあさんを悼んでくれた近所の人たちの中にもなにかと手助けしてくれる人たちがあり、野菜を恵まれたり、子供用の古着を回してくれたりした。その対応をしているうちに、気がつく、金足のそれまでいかに狭かった郷里

での交際圏がいくらか広がっていた。自分も少しは地元の一員になったような気がした。おばあさんとソラのおかげだった。

日曜日の朝、金足はソラに居間で空手を教える。これももう一年半以上になるから、ソラはだいぶ上達した。身体の成長とともに突きや蹴りも強くなったし、基本技に加え、一つ一つゆっくり覚えていった型も、もう三つほどをこなしている。しなやかな子供の筋肉は、鍛えれば大人よりも美しい動きをつくる。

初めは、金足が家の中で時々空手の基本技や型をやっているのを、幼いソラがおもしろがってまねをした。それならと、金足は拳の握り方や立ち方から教えるようになった。すぐに飽きるだろうと思っていたが、遊び気分半分で意外に長続きした。ある時、ふざけすぎるのをややきつく叱ってほしいぶ泣かせた。それに懲りて「もうやらない」と言うかと思っていたら、次の時には真剣さが増した。それならと、毎日曜の朝に時間を決めてやることにして、それが今に続いている。道着こそ着ないものの、道場でのように礼から始まり、黙想、準備運動、基本、そして型をいくつこなし、最後に組手も少しやって礼をして終わる。一時間ほどだが、幼い子供にとつては長いので途中で休みをとってやる。自然な心の成長なのだろう、勉強と同じで、このころは初めのころよりはよほど聞き分けがよく、集中力が増した。

ソラや近所のお母さんたちによると、小学校の低学年でも学習塾のほか、ピアノ、水泳、ダンス、サッカー、野球など、いろいろな習いごとをしている子供たちが多いようだ。でも、古い考えなのかもしれないが、小学生のうちくらいはあれこれの習い事にあまりしぼられずにのびのびするのがよいと金足は思っている。近所や公園で友だちとせいっぱい遊んだり、好きなだけ本を読んだりすればよいのだ。習い事は、ソラには今のところ、自分が多少教えられる勉強と空手だけでよいだろう、頭と身体のことでも多少とも自分に自信がつけばよい。

十時過ぎ、車で北の方の町にあるショッピングモールに出かけた。日曜日にはたいていその大きなスーパーで一週間分の食料を買う。ソラは言われた品物を取ってきたり、カートを押したりする。このころでは先に立って、「リンゴは買う?」、「玉ねぎは何個?」、「牛乳は二本でいい?」などと訊いてくる。無理につきあっているようではなく、明るい大きな店で二人で話しながらするたまの買い物を楽しんでいる。金足の方も同じだった。二人分だけでなく、一週間分の食料となると、持参の大きめの布袋が二つ分にもなった。できあいのお惣菜も少し買いはするが、できるだけ手料理を作ろうと金足は思っている。一年半ほど前、おばあさんの入院中に金足は痛い経験をしたのだ。

ある夜、ソラがぐったりして高熱を發した。喉が腫れ、舌が赤くなって発疹が出ていた。金足は慌てた。なんとか緊急外来を探り、問い合わせると、隣の市に見てくれる病院があった。すぐ車に乗せて連れて行った。診てもらおうと、細菌の感染症ということで、抗生剤をき

ちんと服用すれば一週間ほどで治るでしょうということだった。

幸い熱も二日程で下がり、学校も三日休んだだけです。しかし金足は、自分の意識の低さを反省した。まだまだいたいけないソラの健康には、預かっている以上、自分ができるだけ留意してやらねばならない。もし栄養不良や病気にさせてしまったら、ソラ本人にはもちろん、頼まれたおばあさんや両親に申しわけない。それにまた、自分の方がどうかして倒れてしまったら、たちまちソラが困ってしまう。自分自身は、体力の衰えはともかく、長年まず健康で持病もなくやってきたが、明日はわからない。世の中の片隅での、自分とソラの位置どりの危うさを、あらためて知らされたように思った。

それ以来、金足は主婦ならぬ主夫になろうと決心した。食べ物や栄養のバランスには気を配ったし、パソコンからプリントアウトして料理のメニューも増やした。幸い以後ソラは、学校の教室から軽い風邪をもらってくるようなことはあっても、緊急で医者にかかるようなことはなかった。

料理に関心を向けると、金足は毎日の食材が気になってきた。それで去年の夏には思い立って荒れたままになっていた庭の一部を掘り返し、菜園に戻した。かつて母親が長年野菜や花々を育てていた日当たりのよい場所だ。ソラといっしょにスコップで腐葉土を入れ、ホームセンターで買ってきた野菜の種を植えた。種が発芽し、伸びていき、花を咲かせるのをソラはおもしろがり、水やりの係を引き受けた。金足にとっても野菜を作るのはほとんど初めての経験だったが意外におもしろく、秋の終りには葉物が穫れだし、冬を堪えて過したものが春には急に伸長して食膳に上せられた。畑のかたわらには狭いが花壇も作り、秋にはコスモスを咲かせ、今はラベンダーやチューリップが咲いている。

ショッピングモールの中には衣料品店や百円ショップやおもちゃ屋も入っていて立ち寄ってみる。ソラは、おばあちゃんの教えが今でも効いているようで、自分からこれが欲しい、あれ買ってとせがむことはないが、金足にはソラの関心を引くものがある程度はわかっている、時々買ってやる。

百円ショップから出たところで、後ろから太い声で呼び止められた。金足がふり向くと、日焼けした顔に紺の帽子をかぶって農夫然とした同級生の田村が立って歯を見せていた。中学時代に親しかった男で、一年ほど前に偶然別の店で出会い、互いに相手の変貌に驚きつつ再会を喜んだ。それから時々連絡しあうようになり、二度ほどは家まで訪ねてきた。やはり中学時代の仲間だった広山を連れてきたこともある。

「ソラちゃん、元気やねえ。やさしいおじいちゃんといっしょでええねえ」

ソラも笑顔を返す。田村には、問われるままにおおまかにソラのことは話してあった。

今度中学時代の仲間数人で飲み会をするから、おまえもぜひ出てこい、と電話で誘われたのは先週のことだ。金足はソラを一人にしてはおけないので渋ったが、一回だけのことだからソラちゃんは近所の誰かに預かってもらったらええではないか、皆久しぶりにおまえに会

いたがとるから、と田村は強引だった。前にも一度同じような誘いを断ったことがあるので、金足は折れた。帰郷して以来、相変わらず狭い人間関係の中で生きているので、ソラのためにも少し知友の関係を広げるのもよいかと思つた。二、三時間くらいなら、橋本さんとか、ソラがふだん行き来している近所の友だちの家に預かってもらえるだろう。田村はその飲み会のことを確認して去っていった。

買物から帰って、二人で荷物の仕分けをする。あまり大きくはない冷蔵庫はすぐいっぱいになった。

昼食後、ソラは自分でリモコンを操作してテレビの画面でウェブの動画を見はじめた。それもソラの日曜日のルーティーンの一つだ。以前は家にはパソコンもテレビもなかったのだが、ソラと同居するようになってから買いそろえ、ネットもつながるようになった。金足は隣の部屋で寝ころんで少し休んだ。タブレットの動画で評論家の時事的な政治評論を聴いているうちにうとうとした。夢も見ていたようだ。

「ねえ、ジツチャ、起きてよ」という声が顔の上でした。

「東浜に行くんでしょ！」

「ああ、そうだった」と金足は身を起こした。

午後二時を少しすぎたところだ。リュックにペットボトルやお菓子を入れて背負い、二人は車庫に置いてあるそれぞれの自転車を引き出した。

春が闖けて、もう半袖でもよいような好天の日だ。路地を出て県道を少し走ると打樋川で、橋は小高くアーチ状にかかっている。その真ん中でいったん自転車を降りた。自転車でこの橋を渡る時、いったん停まって川を眺めるのが習慣のようになっていた。二人の時も、金足一人の時もそうだった。

田園地帯のまん中を行く運河のような川で、いつものように動かない水の面にはのどかにクサガメが浮き、微風に絹のような水紋が走っている。水鳥も泳ぎ、両側の低い土手の雑木はもうみずみずしい新緑だ。南の方へまっすぐ流れて数百メートル先でゆっくり右手へカーブしている。そのだいぶ先には水門の所で海に注いでいるはずだ。神経質なクサガメたちがだいぶ距離はあるのに人の気配に驚き、あわてて潜っていくのをソラはおもしろがった。

橋を下ってからは田園の中を通るまっすぐの道で、田植えが終わった田の面は十分張られた水が池のように光っている。そうした田んぼが続いているので、一帯がまるで災害のために浸水でもしてしまったように見えるくらいだ。ソラは広めの歩道を、先になって危なげもなく漕いでいく。乗っている自転車は、前のものが小さくなり、去年近所の自転車屋で買った換えたものだ。前のも赤色の車体だったが、ソラはまた赤色を選んだ。金足の自転車は地元に戻って間もなく同じ店で買ったサムライブルーの車体で、金足が地元での暮らしにすでに慣れてきたのと同じように足に馴染んでいるが、あまり手入れもしないのでやや古

びている。

気持ちのよい日で、広い東浜にもいくらか人が出ていた。犬を連れしたり、投げ釣りをしたりしている人もいる。防波堤の内側の遊歩道には散歩の人たちが組になって歩いている。波打ち際を歩き、ボール蹴りをちよつと二人でやってから、防波堤のコンクリートの段に坐っておやつを食べた。海はおだやかで寄せる波の音も今日は小さい方だが、船も浮いている沖の方には風波が少し立っている。正面の海をまっ黒な鵜が横切り、水平線の上に沖の島がすすんでいる。

「ジツチャ、ママもこの景色、見たことある？」とソラがくりくりした目を向けて訊いた。

昨夜、ソラのママから久しぶりに電話があったのだ。それとも、前の方の波打ち際で親子連れが楽しそうに遊んでいるのを見て思い出したのだろうか。

「そうだね。見たことあるよ。ママも大人になるまではこっちにいたからね。きつと夏にはここで泳いだこともいっぱいあるよ」

いつかおばあさんから、ソラの母親のことも金足は聞いた。横浜で看護師をしていたが、仕事のことと夫婦のことで苦しんだのが原因で神経を病み、体調が悪くて長く療養中だという。電話はなく、たまに葉書が届くだけだ、それでも生きていることがわかって嬉しい、一度ソラを連れて面会に行ったが、満足に話もできなかった、ソラもかわいそうだが、あの子もかわいそうなんです、と話した。金足は一つだけ、こつちへ戻って療養するわけにはいかないのですか、と訊いた。いろいろあってね、ようわからんけど、今はむしろ親子が離れている方がええようなのよ、とおばあさんは声を落とした。

ママは去年の冬の母親の葬儀にも帰郷できなかった。たまに葉書が来ていたというが、それも来なかった。ところが、去年の秋の初めごろ、金足のもとへ、そのママから突然手紙が届いた。文面は短いものだったが、小さい丁寧な文字で、母が世話になり、その上娘まで世話になっていることを謝してあった。今は自分が回復して、ソラといっしょに暮らせるようになるのが唯一の望みだとも書いてあった。そして別紙で、ソラ宛てに、少し大きな文字で、「ソラ、もう一年生だね。すきだよ。あいしてるよ。げんきだね。ママもがんばるね」とだけ書いていた。ソラは自分で声を出して読んで、笑みを浮かべた。次には顔がゆがんで「ママ、ママ、マーマ」と声を上げて泣いた。金足も涙ぐみながら、ソラを抱き寄せた。

手紙を読んで金足はだいぶ安心するところがあった。初めて直接、ソラの母親の娘への気持ちを知ることができたし、またこうして手紙をよこせたくらいだから回復の希望はあるとも思えた。そこに書かれていたように回復して、もしソラといっしょに暮らせるようになったら、それ以上のことはない。返事にソラの近況を書き、プリンターで印刷した写真も数葉添えた。自分の携帯番号も知らせた。

それからしばらくはまた音信がなかったが、初冬のある夜、初めて金足のスマホに電話がかかった。食後で、ちょうどソラの勉強を見ていたところだった。金足は初め誰だかわから

なかったが、「あのおう、娘のソラが大変お世話になっております」と言うのでびっくりした。弱々しい声ではあった。二言、三言応答したところで、「ソラ、ママだよ」と代わった。ソラは案外ふつうの顔で出て、「うん、うん」と答えていた。「うん、わかった。ママも元気でね」と終わった。

年末近くに、手紙とクリスマスプレゼントとお年玉がいっしょに届いた。それ以来、月に一度くらい電話が来るようになった。会話はたいがい短かく、向こうのようすもあまりわからなかったが、ソラは電話で時おりママと話することに慣れた。春の初めにかかってきた時、金足の方からビデオ通話を提案してみた。母親は少しとまどうようだったが、承諾した。小さな画面に初めて母親の顔が映つたのを見て、ソラは昂奮し、「ママ、ママ」とさかんに呼びかけ、問われるのに応じて笑顔で学校のようなすや生活のようすをしゃべった。金足も気恥ずかしかったが画面に出てあらためて挨拶した。母親のようすが思ったよりおだやかで、ふだん着で病室ではなくふつうの部屋のようだったので少し安堵した。ビデオの画面が切れると、ソラは急に寂しくなったのか、それまで耐えていたのか、笑顔が一変して、「ママ、会いたいよう、ママ、会いたいよう」とくり返しながらかく泣き声が止まらなかった。

ソラはもう金足のスマホの操作に慣れている。それでこのごろでは、金足の許可を得て時々動画や写真や音声で母親に送るようになった。母親も時々返してきた。そのようにして母親と交わる日常をいくらか取り戻すことができた。今も東浜の海を映し、金足に自分の姿を撮らせて早速母親に送っている。また二人で自転車にまたがったところ、「よかったねー。東浜はママもよく知ってるよー」と音声の返信が届いた。

居酒屋で二つのテーブルを囲んだ同級生の会は、時間とともに乱れていった。金足は初め場違いな感じがぬぐえなかった。男四人と女三人の彼らは、地元で長年つき合ってきた気のおけない仲間たちらしい。田村と広山もその中にいるが、その二人以外は久しく会わなかった。顔つきに中学生の頃のおもかげを認めても名前はなかなか出てこなかった。

それでも同級生の気安さで話ははずみ、金足もそれぞれの身の上話をおもしろく聞いた。久しぶりの酔いも心地よかった。男たちは、一人が農業をしているほかは役所や会社をもう定年退職している。女たちも自由な身の上らしく、趣味や孫や医者通いの話が多く出た。その場にはいない同級生のうわさ話の中には、近年病没した男女の話も出た。金足は聞きながら半世紀の昔と今とがうすくつながってくるようだった。金足も近況を問われたが、三年前に帰郷したこととパートのことくらいしか話すことはなかった。

二時間はすぐに過ぎた。年寄りなりに意気の上だった皆は、近くのカラオケ屋で二次会をやるという。金足は詫びながら別れを言った。近所の家にソラを迎えに行かなければならぬ。い。

店の前での別れ際に、酔いのだいぶまわった砂川という男が、金足の腕をつかんだ。そし

て、

「昔の話じゃけんどなあ、おまえ、神戸で人を殺^やつてムシヨに入ったって、ほんまか？ ムシヨはどうだったんじゃ？」と訊いた。

一瞬皆が黙った。あわてて田村が、

「アホウ！ おまえ、何訊くんじゃ！ アホウ！」と砂川の肩を押しながら怒鳴った。「ほんまじゃわ、もう」という誰かの声が聞こえた。砂山は、

「あ、ごめんごめん。悪かったわ。これはゆうたらあかんかったんじゃなあ」と笑いに紛らした。

そう言われても、金足はとくに腹も立たなかった。世の中のそういう声や視線にはすでにいやというほど苦しんできたのだ。しかし、皆と別れてからタクシー屋まで歩く間に、酔いは急速に冷めていった。一まとまりの皆と自分との間の距離を意識した。気を許したとたんに顔を一発張られた感じで、郷里の町が急に冷え冷えと感じられた。でも、タクシーを降りるころにはもう、いやな感じは去った。そしてともかくも自分の存在を気にして仲間に入りようとしてくれる同級生たちをありがたいと思った。自分も彼らも、狭い所でいがみ合ったり競い合ったりするにはもう老いすぎている。

近所の橋本さんの家に迎えに行くと、ソラは「ジツチャー！」と言って玄関に飛び出してきたそのまま金足に抱きついた。「おお、おお、仲がええんじゃねえ、二人は」と家の人たちが笑った。

四月下旬の晴れた日に、小学校で授業参観があった。金足は会社を休んで自転車で出かけた。授業参観や運動会や音楽会など、学校に保護者参加の行事がある時には、金足はできるだけ出席することになっている。年代のちがう若い父母たちの中に立ち混じることにもなるがそれはあまり気にせず、ソラの学んでいるようすを知りたいのはもちろん、今の教育現場のふんいきにふれたいという気持ちもあった。学校は昔とどう変わったのか、教育現場からソラたちがこれから生きていく社会がどのように見えるのか、といった興味もあった。世の中の片隅で目立たず生きていく意識が相変わらず強い金足にとって、学校は社会を見る身近な一つの窓のように思えた。

小学校は昔金足も通った中学校の場所にあつて、校舎はもちろん建て替わっているが建物の配置やグラウンドのようすはそう変わっていない。二階の教室に後ろから入ると、三十人ほどの子供たちが机を並べていた。中にはソラがいっしょに遊んでいる近所の子供たちの顔も少し見分けられた。授業は国語で、担任の女の先生が教科書のページを前に掛けたスクリーンに大映しして指示棒で一文一文たどりながら、しきりに子供たちに問いを投げかけていく。子供たちはよく手を上げ、次々に答えていく。ソラもたいてい手を上げ、一回、二回と当てられ答えていた。授業の進みは遅く、先生と子供たちとのやりとりが多くてなん

だかめまぐるしい感じだったが、子供たちが授業をそれなりに楽しんでいるようには見えなかった。強制的であるにしろ、子供たちは一日五時間も六時間も毎日こうして教室の椅子に坐って学んでいるという当り前のことに、何やら金足はしきりに感心しながら帰った。

連休の初めに祐佳の一家四人が空路でやって来た。到着した空港付近でレンタカーを借り、その足で南下して昼過ぎには金足の家に着いた。金足はソラといっしょに出迎えた。ソラのことはあらかじめ伝えてある。夫婦は北海道の名産を土産に持って来て、ソラも新しい衣類や学用品をプレゼントされ、喜んだ。

会うのは学生時代以来の祐佳は太りじしのたくましそうなお母さんになっていた。祐佳に、「ほら、おじいちゃんだよ、ちゃんと挨拶しなさい」と言われた活発そうな小六と小四の男の子たちは笑顔で殊勝にふるまった。金足は自然と手を差し出し、子供たちの手を包んだ。そばで祐佳が涙を拭いた。写真で見っていたばかりの祐佳の夫も、都会的な感じの好人物に見えた。航空会社に勤めていて便宜があるので、家族は国内外を飛行機で旅行することが多いのだという。

ソラは初めもの珍しそうに四人家族を眺めているばかりだったが、前もって祐佳に言われていたのか二人のお兄ちゃんがよくかまってくれるので、すぐに笑顔になった。歯切れのよい関東弁も少し思い出したようだ。子供たちは三人でサッカーをするといつて近くの神社の境内に出かけて行った。

祐佳は北海道の千歳での暮らしや子供たちのことをいろいろしゃべった。そして、おじいちゃんとおばあちゃんのこの家、何となく憶えている、と言った。初めぎこちない丁寧語だったのが、途中から少し努力するふうに実の親子らしい言葉づかいに変わった。

「ああ、お父さんを見て安心したわ。ソラちゃんもかわいい、いい子だね。でも、大変じゃないの？」と訊いた。

「まあ何とかやってるよ。まだ身体は動くから。ソラも家事をよく手伝えるようになってきたしね」

「一度、千歳の方も見に来てよ」

「ええ、ぜひいらしてください。いらして長くご逗留ください。いろいろご案内します。祐佳は、しばらくでもお父さんといっしょに暮らしたいと言っんですよ」と夫が続いた。

金足は札を言った。

「庭に赤い自転車があるね。ソラちゃんのだね。なつかしいー。神戸で幼稚園の時、あたしも赤い自転車を買ってもらって、とてもうれしくて公園でよく乗ったわ。お父さん、憶えてる？」

金足はうなずいた。記憶はもうあいまいだったが、言われてみるとたしかに赤色の車体で、幻なのか、小さな祐佳が団地の周辺や公園で乗り回していた情景が浮かぶ。それにしても、祐佳の顔を見れば、親としてこの子にはほんのわずかなことしかしてやれなかったとの痛

みを伴う悔恨がやはり先だつのはしかたなかった。この子が今のソラよりもまだ幼い五歳の時に、まったく自分一人の瞬間の悪行のせいで放り出してしまった。そしてかけがえのない実の母さえも奪う去ることになってしまったのだ。

子供たちが帰ってきてから、天気もよいので金足が誘って二台の車を列ねて東浜に行った。男の子たちは浜と海を見るなり、「わあ、広い！」と歓声を上げ、早速大きな砂浜でパパとソラも入れて追いかけてこを始めた。金足と祐佳は防波堤の段差に坐り、それを眺めた。「ああ、この浜も何となく憶えてる。私、ここで泳いだことあるねえ。おじいちゃんと、魚釣りをしたねえ。……ああ、やつぱりここに来てよかった」と祐佳は笑った。金足は、

「向こうの暮らしはどうなんだ？ 幸せにやってるのかね」と訊いた。

「うん、彼は仕事が忙しいけど、家庭も大事にするやさしい人よ。私は毎日家事と子育てに追われてるわ。でもまあ、その間が幸せなんだろうね。あの子らが小さいころね、子育てしながらよくお母さんを思い出したわ。お母さんもこうやって私を育てたんだなあ。あの子らをお母さんにも見てもらいたかった。でもあたし、お母さんの記憶も少ないんだけどね」悪かった、ほんとうにお父さんが悪かったと金足は言いかけたが、それも軽々しい気がして、首を折って、

「お詫びの言葉もないよ」とだけつぶやいた。

「ううん、お父さんを責めようというんじゃないの。ただ自分も母親になってみると、自分を生んでくれた実の母がよけいになつかしいってこと……。お父さんは今までよくやってきたじゃない。ソラちゃんを預かってちゃんと育てているのもえらいわ。誰にもできることではないわ。きつと、お父さんにとってソラちゃんはあたしの分身なのね。生まれ変わりとこのもおかしいから。……お父さん、いつまでも元気であってよ。お願いだから」

砂粒の被ったコンクリートの上に涙が落ちた。金足も「ああ」とうなずきながら目を拭いた。少し経って、金足は、

「千歳は、冬は寒くないかね」と別のことを訊いた。

「うん、北海道の家は二重窓だし、暖房設備が整ってるからね。千葉や東京よりもあったかく過ごしてるよ」

それから祐佳はまた千歳での家族の暮らしぶりについてしゃべりかけたが、波打際で砂の城づくりを始めたらしい子らに、「ママも来てよ！」と呼ばれて立っていった。ソラは皆に囲まれ、かまわれて楽しそうだ。浜での砂遊びには慣れているので、勝手知った顔で生き生きとふるまっている。

一家は近くの町にホテルを取ってあり、夕食は勝手だったがそこで金足とソラの分も予約してあるという。やはり二台の車でそのホテルに行つて一階のレストランでいっしょに食べた。終わると、金足はあらためて娘夫婦に遠来の札を言い、そして男の子たちに何か買うようにと袋に入れた小遣いを渡し、もう一度その子たちの手を握って別れた。祐佳はまた

泣いた。

「ほんとうに、ぜひ千歳にいらしてください。この夏にでも。ソラちゃんといっしょに」と夫の方も別れを惜しんでくれた。

車を出すと、金足も涙があふれてふと声もれた。「ジツチャ、だいじょうぶ？」と助手席のソラが気にした。半日にぎやかに遊んで、ソラは少し疲れた顔をしている。

夜、金足は珍しく寝つきが悪かった。妻に面差しのよく似た祐佳に会ったせいで、妻の顔がまな交いにまつわった。今も若いままの妻に語りかけた。今日一日のこと、また長い間のことを思い浮かぶままに頭の中でしゃべった。笑ったり、悲しんだり、ちよつと怒ったり、妻はいくつもの表情を作って聞いていた。

その数日後の夜、ソラの母親からまた電話がかかった。ひとしきりソラと話した後、少し話があるというので金足は代わった。

母親はこんなことを話した。

「私は長く療養しておりましたが、おかげさまでこのところ心身のぐあいはだいぶよくなってきました。先月からは試しに近くの病院でパート勤務を始めましたが、何とかこのままやっていけそうな気がしています。それで、大変身勝手な話ですけれども、ソラをこちらに引き取りたいのです。ソラの学校のこともありますし、あれこれ準備も必要ですから、もう少し時間をいただいて、ソラの一学期が終わるころ、できれば迎えに行きたいと思っております。ただ、まだ自分の健康に十分自信があるわけではないですから、だめになる可能性があります。ですから、このことはまだソラには言わないでください。しばらくしてまた連絡させていただきます」

金足は嬉しく聞いた。ママとの同居。この数年のことを考えれば、ソラには夢のような話だ。でも不安も伴う。一時期回復したから試しに同居してみるというようなことでは、もしそんな軽々とした気持ちがあるなら、だめになった場合、ソラの心は今よりもっと深い傷を負うことになるのではないか。

その夜も金足は頭が昂ってなかなか寝つけなかった。母親の健康と勤めの継続を願った。スマホの画面でソラと母親をいっしょに見るようになったら嬉しいだろう。いや、ソラが行ってしまった後、自分はどれだけ寂しいか。いや、そんな自分ひとりの都合なんかはどうでもいい。パートの看護師として勤めるようになったというが、それで生活はやっていけるのか、ソラを見てやる時間は十分あるのか……。

隣りの蒲団のソラの寝顔を眺めた。無心な、おだやかな顔をしていた。掛け蒲団から足がだいぶ出ている。初めて会ったころは小さな身体の無邪気な幼児だったのが、手足も伸びてもう少女になりつつある。あれから二年半以上が経ったのだ。子供の一月は老人の一年に匹敵するというがまったくそうだ。大きくなった。そしてまだまだ大きくなる。

国道から右折してJRのレールが一本だけ通っている踏切を渡って少し走ると西山のドライブウェイに入る。西山は平地に沿う山であり高くはないが、山頂付近にこの一帯の人々の信仰を集める古社があって、正月や花見の頃はにぎわう。くねくねと走る道の両側の桜並木はもうのびやかに青葉の枝を広げている。去年も今年も、春休みには二人で花見に来たので、ソラはもうもの慣れ顔で景色を眺めている。

山頂下の広い駐車場には花見の季節とはちがって車は数台しか停まっていなかった。石段を少し上ると左手にリフトの設備があつて、ガラガラと音を立てていた。ソラはその乗り場に走っていき、早く早くというふうに明るい顔で手招きする。先に乗せてやって前後のシートに坐り、後ろから押し上げられるように登っていくと左手に眺望が開けた。田んぼの中に集落があり、道路が走っている。島々を浮かべる湾が青く広がり、金足の職場のある火力発電所の高い煙突も見える。

リフトから下りるとソラは勝手知ったふうに先立ち、軽々と参道を上っていく。境内に参拝客はちらほら見えるばかりだった。参拝の後、何となく傍らの由緒書きに目がいった。ソラがそばに立ってたどたどしく読み上げていく。金足が見てやっている漢字の自習はもう三年生で習うものまでおおよそ終わっているが、さすがに由緒書きのようなものには歯が立たず、「もう、わかんない」とすぐに止めてしまった。金足もここに来るたびに目を止めるが、土地の女神らしい祭神の名前すら覚ええない。

社務所にいた白衣、袴の人と目が合い、金足は挨拶した。先方も「ああ」と頭を下げ、窓からソラに、

「おじいちゃんといっしょにお参りで、ええねえ」と笑いかけた。神主の森中さんと、家が近く、孫の一人が小学四年生の女の子で時々ソラと遊んでくれる。大きな家に家族三代で暮らしている森中さんは、毎朝早く車で金足の家の前の道を通って神社に「出勤」していく。それが何十年も続いている。

やはりこの神社の神主だった森中さんの亡き父親を金足はおぼろげに覚えている。金足より二、三年上の森中さんがいつ森中家の代々の家業になっているらしい神職を継いだのかは知らないが、父親によく似ている白衣姿の彼をこうして神社で見ると、金足は郷里のゆつたりとした時間の流れを感じた。この山も神社も昔と変わらず、神職まで同じようなのだ。何百年とそうなのかもしれない。その前では、人の世のめまぐるしい現実の意味は、相対的に小さかった。

森中さんとは二言、三言話ただけで別れた。ソラと境内のベンチに坐ってお茶を飲み、おやつを食べた。

「あ、島が見える！」

食べながらソラが指さした。そのベンチからも眼下に大きな景色が見渡せた。いつもは東浜から眺めている人の寝姿のようなかたちの沖の島が、強い光のぐあい紫色に、山上から

はいくらか立体的に見えた。

「あれは東浜からいつも見ている沖の島だよ。今日はくつきり見えるねえ」

「ジツチャ、あの島にも人が住んでるの？」

「ああ、住んでるよ。ジツチャも行ったことはないけどね」

「寂しいねえ」

「何が？」

「海の中に一つだけの島で、寂しくないんかなあ」

「そうだねえ。一つだけでも島は強いよ。風にも波にも台風にも耐えて、たくましいよ。それにいつも海や空がそばにいるんだから。だからあんなにきれいなんだよ」

「ああ、海や空も島のお友だちなんだねえ。……ジツチャ、横浜に行ったらソラ、お友だちできるかなあ。学校のお友だちできるかなあ」

「だいじょうぶだよ。いっぱい友だちできるよ。ソラならどこでもやっていけるよ。それに大好きなママがそばにいるんだし。ソラは一人じゃないよ。楽しく、笑いながら毎日暮らせるよ」

「ジツチャも、仕事忙しいだろうけど、たまに横浜に来てよ。ソラに会いに来てよ。ゼツタイにね！」

「ああ、行くよ。大きくなったソラを見に行くよ。元気なうちにね」

三日ほど前、横浜のソラの母親からまた電話があったのだった。やはりおずおずとした調子で、

「よく考えたのですが、やっぱり七月の終りごろソラを迎えに行かせていただきたいと思います。すみませんが、ソラにもそう伝えていただけますか。……あのう、恥ずかしくて今まで言えなかったのですが、離婚した相手とこのごろまた会うようになりました。お互いに反省し、お互いを理解するように努めています。まだ少し先のことになりますが、また三人でいっしょに暮らせるようになるのではないかと思います」

途中から涙声になって、ソラには、親の身勝手に、長い間、取り返しのつかない、ほんとうにつらい思いをさせてしまった、そして金足さんには、感謝の言葉もない、母も含めて、私たち一家を救っていただいた、と話した。

金足は、「わかりました」と言い、

「ほんとうによかった、よかった。……お母さん、嬉しいことはお母さんからソラちゃんに直接伝えてやってください」とソラに代わった。「なーに？」と出て「うーん、うーん」と答えていたソラの顔がやがて曇った。涙がぼろぼろこぼれて、後は「マーマ、マーマ」としか言えなかった。

この上なく嬉しいことだろうと思ったら、それから二、三日ソラは沈みがちで無口になった。遠くのママのもとに移ることを思っては、想像が追いつかず、戸惑っているようだった。

でも金足はそのことについて訊かれれば答えたが、自分からはあまり口出ししなかった。ソラは自ら事態の変化を受け止め、想像し、考える必要がある。そして小さいながらに、ソラにはもうそれができる力が備わっているよう。

昨夜、ソラは自分の勉強機の椅子に坐りながら、背中を見せてグスグス泣いていた。訊くと、横浜に行くのが怖い、ママには会いたいけどどうしても怖いのだという。ジツチャや友だちと別れるのはいやだ、とも言ってはいぶぐずった。金足はソラをそっと抱いてやった。ソラの気持ちはジツチャにもよくわかるよ、でもだいじょうぶ、ぜーんぶだいじょうぶだよ、と言ってやった。

梅雨の晴れ間の強い日差しを受けて、眼下の陸地も海も沖の島も色あざやかでくつきりしていた。今日はなんとなく、ソラにこの土地をもう少し見せておきたいつもりもあつて出てきたのだが、大きな景色に向かえたのはやはりよかった。ソラはこの景色をやがて忘れるだろう。でもそれはそれでよいのだ。

ドライブウェイを下って少し南下し、山上からも視野にあった近くの港を見に行った。そこはソラは初めてのはずだった。たぐさんの漁船が係留してあった。貨物船の着く岸壁の端に、思いがけず沖の島と結ぶ連絡船の栈橋があり、ちようど二十トンくらいの連絡船が低いエンジン音を響かせて出ていくところだった。それが航跡を描きながら防波堤の端を巡って見えなくなるまで、二人は岸壁に立ってなんとなく見送った。金足は昔からずっとその島を神秘的な感じで眺めてきたので、その船の姿もどことなく神秘性をまもっているようだった。

港の北の端まで行って岸壁に車を停めると、間近に丈高い頑丈そうな水門が見えた。水門は開き、下に藻を含んだ緑の水がわずかに動いていた。

「ほら、あそこが打樋川の河口だよ。川の流れの最後のところ」

「打樋川って？ ああ、あの自転車でいつも橋で停まって見てる川？」

「そうそう。あの橋のあたりから水はね、田んぼの中をゆっくりゆっくり曲がりながら流れてきて、ここから海に出るんだよ」

「川の終点、っていうことだね。お魚いる？」

「そう、真水と潮水が混じり合っている所だからね、ハゼとかボラとかがいると思うよ」

「じゃああの橋のところのカメさんも、ここまで流れてくるのかなあ」

「あのカメさんたちは真水が好きだからねえ、ここまでは来ないよ」

川の終点など人生の終りのようなもので、ソラに見せるようなものではないのかもしれない。ソラは自分が見せるというより、自分の方がふと引かれたのだろう。何にでも始まりがあれば終わりがある。ゆっくりと流れてきたこの子と二人の暮らしもやがて終わろうとしている。

ソラの転校の手続きは、母親と連絡を取りながら進めた。金足が学校と役所に出向き、受領した書類を横浜の母親に送った。

七月の中旬に学校で個別面談があり、ソラは少し不安定なところも見られたが、勉強はよく努力している、友だちもふえて元気に遊んでいると聞いた。そして若い先生はソラとの別れを惜しんでくれた。

七月下旬の一学期の終業式の日、ソラは十時ごろにもう帰って来た。二階から、友だち二人と強い日差しのある道を歩いてくるところが見えた。ソラは家に入ってランドセルを置くと、少しはにかみながら、「ジツチャ、これ」と通知表を見せた。「おお、いい成績だねえ、ソラ。がんばったねえ」。昔と違ってこのごろの通知表は絶対評価のために甘くなっているらしいにしても、評価点は高く、一年次よりも上がっている感じだった。これなら学年の中途で都会の学校に移っても何とかやっていけるのではないかと金足はやや安堵した。あまりテレビは見せないようにしたことも、毎晩の私塾も、多少効果があったわけだろう。

式後のクラス会で、担任の先生はソラが二学期から転校することを皆に知らせたという。それで、最後だというので、何日かは友だちと遊びの約束ができたらしい。昼食を終わるか終わらないかで二人の女の子が早速遊びに来て、家の中や近所で遅くまで遊んだ。

数日後にはソラの友だちのお母さんたちが送別のパーティーを開いてくれた。ふだんからソラがよく遊びに行っている近所の橋本さんの家に子供たちも五、六人集まるということで、金足も誘われたのだが、ちよつと顔を出して礼を述べただけで失礼した。夕方、ソラは嬉しそうにいっぱいプレゼントや手紙の入った紙袋を提げて帰ってきた。

夏休みに入っても、金足の勤めがある日にはソラは学校の児童クラブに通った。金足が食事を作り、ソラが洗い物をした。朝夕、ソラは庭の野菜や花に水をやり、キュウリやミニトマトを収穫してきた。休日は空手をして、いっしょにスーパーへ食料の買い出しに行った。暑いので東浜に泳ぎに行ったりしましたが、夜は食後に居間のテーブルで勉強をした。ふだんと変わらない暮らしをしているうちに、その日が近づいてきた。ソラは毎日カレンダーを見て残りの日数を数えた。口には出さなかったが、カレンダーを見るのが金足はだんだんつらくなってきた。

九月の休日の朝、金足はやや遅い朝食をすませ、庭の畑や花壇に水やりをしてから散歩に出た。このごろ足腰の弱りを感じている。県道のそばの家の菜園で吉川さん夫婦がゆっくり動いていた。声をかけると、三人でしばらく立ち話になった。

以前に聞いたところでは、夫婦は十数年前に県庁のある街からここに小さな家を建てて引っ越してきたので、田舎暮らし、中でも菜園での野菜作りを楽しみにしているということだった。夫婦はともに八十代なかばの高齢だが、会うといつも顔は明るい。どういいう経緯があつてここに移ってきたのかはよく知らないが、自身も移住者めいた意識の抜けきらない

金足はなんとなく親近感をもっていた。老夫婦の方でもたまの立ち話を楽しみにしてくれて、できた野菜を少し分けてくれることもある。逆に金足は夫婦を車に乗せ、ホームセンターに行って買い物を手伝うこともある。

「ソラちゃんは向こうでどうしてるかね？」と腰に手を当てながらおじいさんの方が訊く。夫婦はソラを見かければ何かと声をかけてくれていた。

「ええ、おかげさんで、お母さんと元気にしてるようです」

「ほら、ええ。かわいらしい子じゃったなあ。あんたもよっぽど寂しいなったなあ」

おじいさんは同情の顔つきだ。

「ほうゆうてもまあ、あの子、学校の休みになったらまた会いにくるわ。家もまだこっちにあるんじやし。なあ金足さん」とおばあさんは慰める調子だ。

「ほうじやねえ。休みになったら」

迎えに来た母親とソラが行ってからもう五十日近くが経つ。母親という人は、実際に会うと、中背で小太りの、あのおばあさんによく似た面差しの人だった。泣きながらソラを抱きしめ、やさしく声をかけるようすを見て、これならもうソラも安心だろうか和金足は思った。母親は自分の実家にソラと二泊して荷物をまとめるなどした。金足の車で、北の方にある両親の墓へ参りにも行った。その間、ソラは急に赤ちゃん返りしたように幼くなってしまい、もうママのそばを片時も離れようとしなかった。帰る時は空港まで、金足は二人を車で送っていた。搭乗口のところで別れる時、さすがにソラは「ジツチャ！」と抱きついてきて、声を上げて泣いた。金足も涙を浮かべながら抱き上げてやった。母親は何度も礼を述べて頭を下げた。母親がまとめていったソラの荷物も、その日のうちに運送屋まで運んで送った。

その夜には無事到着したと電話があった。もうスマホの画面の中でソラが笑っていた。その後何度か電話があったが、ソラがしだいに新しい日常に慣れていくようすが伝わってきた。言葉が早くも関東弁の調子に戻った。安堵の一方で、急速にソラが遠ざかっていくようになった。

散歩から帰ると畳に寝ころんで少し休んだ。書架に並んでいる本が目に入った。これらの子供用の本も横浜に送ってやる方がよいのかどうか、今度電話があった時に聞いてみよう。中の「竹取物語」の一冊に目が止まり、抜き出してちよつと開いてみた。月から一人でやって来たかぐや姫に惹かれながら、物語を熱心に追っていたソラが浮かんだ。物語の終りの方には、それまでかぐや姫を慈しみ育ててきたおじいさんが、かぐや姫を手放したくないと迎えに来た月の王に向かつてなりふりかまわず抗議、愁訴する場面がある。ソラといっしょに読んだ時には思わなかったが、今金足はそのおじいさんの気持ちがよくわかる気がした。おじいさんに自分の気持ちを重ねた。でもまたそう感じている自分をいぶかしんだ。では、自分にとってソラは、一人のかぐや姫だったのか？ そうではなかったし、そうでもあったような気がした。

起き上がったって、暑くなる前にサムライブルー号で近所をゆっくり走り、気が向けばそのまま北の方のスーパーまで行って買物をしてこようと思った。帽子をかぶり、使い古したリュックサックを持って車庫に行くと、奥の方の赤い自転車に目がいった。向こうで早速買ってもらったという自転車の写真が先日送られてきていた。やはり赤い自転車で、そばでソラがピースを笑っていた。

金足はサムライブルー号にまたがると、暑い夏の間には行かなかったが、東浜の近くにある海沿いのサイクリングロードを廻ってみるつもりになった。東浜の北方になお二つ、三つ続いている別の浜に沿って、少しアップダウンもあるサイクリングロードがつけられている。そのさらに北には古い製紙工場があつていつも大きな煙突から白い煙を吐いている。そのコースは数度、ソラともツーリングしたことがある。

途中の打樋川の橋のところでサムライブルー号を停めた。左右は一面、もう刈り取りの終わった田んぼの広がりだ。川は相変わらずクリークのように水が動かず、明るい空と雲と岸辺の草木を映している。ソラといっしょに、四季、この川を眺めてきた。その記憶が景色を揺らすようだった。

クサガメが浮き、魚影も走る川面を見つめながら、金足はやはり仕事は来月にでもやめようと思った。ソラがいない寂しさは仕事を続けることで多少は紛れるだろうと以前には思っていたが、いざ一人になってみると、そう落ち込んではいないと自分では感じた。大人らしく時間をかけて気持ちの上で別れの準備をしてきたのだろうし、老人らしくものごとに関心しにくくなっていくのもあるだろうが、何よりソラが今現在ママのそばにいるという現実には安心がある。ママのそばにいても、それは楽しいことばかりではなからう、ソラも一人の子供として、人間として、今もこれからも生活上の苦労はいろいろ経験していくのだろう。

送り出してみると、もうせつせと働き続ける動機がないようだった。働く動機はなくなつたが、でも生きる気力がなくなつたわけではない。また一人の暇な日々に戻って、退屈になれば田村たちと遊ぶのもよい。まだ行ったことのない北海道に旅を試みるのもよからう。久しぶりに千葉を訪問して墓参もしなければ。まだ身体が動くうちに。

突然、川面に書くように、朝々唱えている般若心経の文句のうちの「諸法空相」という言葉が浮かび、口に読んでみた。川筋の奥に目をやり、周囲の景色を見回し、空を仰いだ。でもその一方で、その言葉の、すべてのものごとは実体がない、空であるという意味とは裏腹に、自分の身体が急に重く、だるく感じられた。汗が流れた。夏が居残っているように、また気温がだいぶ上がってくるようだった。